

古今集仮名序「ことわざ」考

徳 原 茂 実

『古今集』仮名序冒頭部の第二文に「世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心におもふことを、見るものきくものにつけていひいだせるなり」とある（注¹）。本稿ではこの文中の「ことわざ」なる言葉について、従来の多くの注釈において「事業」と解釈されているのが妥当かどうか検討を加え、「言語活動」の意ではないかと主張しようとするものである。

私はかつて、この問題に関して考察し、「古今集仮名序の「ことわざ」について」と題する小論（注²）を発表したことがある。しかしその小論（以下「前稿」と呼称）を発表してから二十年近くが経過した今、改めて読み直してみると、結論に変わりはないものの、前稿には説明の不十分な点が目につき、また付け加えるべきこともある。そこで改めてこの問題について本稿を発表することとした。前稿と重複する記述が少なくない点については、ご寛容を願うものである。

一

まず、右の一文を含む仮名序冒頭部を引用しておきたい。

やまとうたは、人の心をたねとして、よろづのことはとぞなれりける。世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心に

おもふことを、見るものきくものにつけていひいだせるなり。花になくうぐひす、水にすむかはすのこゑをきけば、いきとしけるもの、いづれか歌をよまざりける。力をもいれずしてあめつちをうごかし、目に見えぬおに神をもあはれとおもはせ、をとこをむなのなかをもやはらげ、たけきもののふの心をもなぐさむるは歌なり。

さて、問題の「ことわざ」について、近代の主な注釈書がどのように説明しているか、次に列挙してみる。

○ことわざは事柄仕業ということ

中 邨 秋 香 『古今集詳解』 明治四十一年

○「ことわざ」は事と業と。

金 子 元 臣 『古今和歌集評釈』 昭和二年

○「ことわざ」は、一つの詞。事と業の意で、いはゆる事件の意。

窪 田 空 穂 『古今和歌集評釈』 昭和十年

○事と業。事は體をいひ、業は用をいふ。

西 下 経 一 『日本古典全書『古今和歌集』』 昭和二十三年

○ことわざしげきものなれば―いろいろなことがあるので。

佐 伯 梅 友 『日本古典文学大系『古今和歌集』』 昭和三十三年

○ことわざ繁きものなれば―「こと」は「事」で、世の中に起こる現象。「わざ」は仕わざ。すること。行為。「こと」よりも能動的なもの。

松田武夫『新釈古今和歌集』 昭和四十三年

○ことわざ繁きものなれば―公私さまざまな事件にたえず応接しておりますので

小沢正夫 日本古典文学全集『古今和歌集』 昭和四十六年

○ことわざ繁きものなれば―様々の出来事にかかわるものなので

奥村恆哉 新潮日本古典集成『古今和歌集』 昭和五十三年

○事業 事やわざ。なすべき行為、仕事など。

小島憲之・新井栄蔵 新日本古典文学大系『古今和歌集』

平成元年

○ことわざ繁きものなれば―さまざまな事にたえず応接しておりますので

小沢正夫・松田成穂 新編日本古典文学全集『古今和歌集』

平成六年

○ことわざしげきⅡ「こと」と「わざ」。「こと」も「わざ」も実際的にはほとんど変わらないが、「言」と同根であることによつてもわかるように「こと」の方が抽象的であるのに対して「わざ」は『万葉集』に「行事」という字をあて『日本書紀』神代巻に「行」という字を「ワザ」と訓読しているように、人が行うことという感じが強い。

片桐洋一『古今和歌集全評釈』 平成十年

以上とりあげた諸注の説は、表現の違いはあるものの、「ことわざ」とは人間が生きている限り遭遇せざるをえない出来事や行為である

という認識の中に収まるように思われる。

ところでこのような解釈は、すでに近世期の学者たちによつて唱えられている。契沖は『古今余材抄』において「ことわざは事業なり。諺にはあらず」と述べており、以後の諸注はこの影響下にあるということができる。加茂真淵は『古今和歌集打聴』で「ことわざは事業なり」と述べ、本居宣長は『古今集遠鏡』において当該箇所を「イロイロト事ノ多イモノジャニヨツテ」と訳している。また香川景樹は『古今和歌集正義』において「人の世にある事や業やしげきはさら也、しか事業しげきまにまに」云々と当該文を解釈し、藤井高尚は『古今和歌集新釈』にて、「ことわざはよろづな事又わざとしてむねとする事のふたつにて大小にわたってひろくいへるころなり」と説いている。

さて、契沖以来、現代に至る諸注の説を「事業説」と名付けておくこととするが、事業説によるこの一文の解釈には納得しがたいところがあるように、私には思われる。「ことわざしげきものなれば」は文脈上、下の「心におもふことを、見るものきくものにつけていひいだせるなり」の原因・理由をのべているとしか考えられないのであるが、事業説によれば、「事業」が多いから「心におもふことを……いひいだす」ということになり、論理が成り立たない。「事業」が多いという現実と「心におもふことを……いひいだす」という行為との間には、因果関係が見出せないからである。「事業」が多いのを理由にするのなら、「心におもふことを……いひいだす」という悠長なことをしている暇はないとでも言うのでなければ理屈にあわないのではなからうか。

竹岡正夫氏はおそらくこの点を考慮されたのであろう、氏は『古

今和歌集全評釈」(注3)において「心におもふことを」という句の「前後とのつながりは、一種の掛詞的用法」であり、「この種のいわば連鎖的文脈は当時の文章にも多く、この集中の和歌においても効果的に用いられている」とのべ、問題の一文を「この世の中にいる人は、事物や行為がたくさんあるものだから心に思う、その思う事を見る物や聞く物に託して、表現しているのである」と訳された。確かにこのように解することができるならば、さきほど指摘した不都合は解消されよう。

しかしこの一文の構造を「世の中にある人、ことわざしげきものなれば心におもふ」「心におもふことを見るものきくものにつけて言ひいだせるなり」という「連鎖型文脈」と見ることはやはり無理であろう。「……なれば」と原因・理由を提示し、そのために生じた結果について「心におもふことを……いひいだせるなり」と述べていることに疑問の余地はないように思われる。氏は「連鎖型文脈は当時の文章にも多く」と主張しておられるが、肝心の『古今集』仮名序において同様の例がこれ以外にも見出されるという指摘はなされていない。また氏は同書一一三番歌注において、「掛詞的表現」として『紫式部日記』と『源氏物語』橋姫巻から例文を引いておられるが、いずれもしいて「掛詞的表現」としなくとも解釈は可能であるし、そもそもそれらの作品と『古今集』仮名序とは文体を異にしているから、同列には扱えないだろう。

「世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心におもふことを、見るものきくものにつけていひいだせるなり」という一文は、「事業」説による限り、これを論理的な文とは見なしがたいのではない。冒頭に述べたように、「ことわざ」なる語の意味を「言語活動」

と解することによって、この一文の論理は成り立つと考えるものである。つまり、「この世に生きる人間は、言語活動が活発なものだから、心に思う事を見るもの聞くものに託して、言葉として表現するのである」となる。ここに論理が成り立っていることは明白であろうと思う。当然ながら残された問題は、「ことわざ」なる言葉を言語活動と解することの妥当性である。なお、「言語活動」とはいかにも現代調の俗語で、古典文の訳語としてはふさわしくないようにも思うが、私の意図するところの表現として、他に適当な言葉も思い浮かばないので、以下このまま使用させていただきたい。

二

「ことわざ」の語構成は「こと+わざ」であろう。「こと」について『岩波古語辞典』には次のように説明されている。

古代社会では口に出したコト(言)は、そのままコト(事実・事柄)を意味し、また、コト(出来事・行為)は、そのままコト(言)として表現されると信じられていた。それで、言と事とは未分化で、両方ともコトという一つの単語で把握された。従って奈良、平安時代のコトの中にも、言の意が事の意が、よく区別できないものがある。しかし、言と事が観念の中で次第に分離される奈良時代以後に至ると、コト(言)はコトバ・コトノハといわれることが多くなり、コト(事)と別になった。コト(事)は、人と人、人と物とのかわり合いによって、時間的に展開・進行する出来事、事件などという。後世コトとモノとは、形式的に使われるようになって混同する場合も生じてきた。

要を得た解説であると思うが、特に古代社会における言と事との未分化については異論はないであろう。したがって、「こと」が行為を意味する「わざ」と結合して「ことわざ」なる言葉が成立すれば、それがかなり広い語義を有することになるのは当然といえよう。辞書等にしばしば引用される古代文献の用例によって見ても、それは明らかである。

たとえば『古事記』上巻に「今諺曰雉之頓使本是也」とある。これは「きぎしのひたつかひ」という言い習わしをさして「諺」と表記し、その起源を物語っているのである。『日本書紀』応神天皇三年に「さばあま」という言い習わしをさして「俗人の諺」としているのも同様で、いずれも「諺」は「ことわざ」と訓むのである。『時代別国語辞典 上代編』の「ことわざ」の項に、「コトワザの成立の背後には何らかの説話があり、その要約とみられるものが多い。逆にまた、伝説が土地や事物の説明をするように、コトワザの成立を説明する説話が生じる。コトワザはいわば説話の核ともいえる」とある説明に、これらの例はまさに適合しているといえよう。同辞典には続けて「それゆえ寓意的なのであり、それが現実の例によって説明されると教訓的ともなる」とあるが、『古事記』中巻に「諺に堅石も酔人を避く」（応神記）とあるのはすでに教訓性をおびていようし、『日本霊異記』中巻九に「古人の諺に曰く、現在の甘露は未来の鉄丸なり」というのは、それ斯れを謂ふなり」とあるのは、まさしく教訓的である。

これらのように、「諺」の範疇に属する「ことわざ」の用例がある一方で、「事業」に属する用例もあるのであって、『続日本紀』巻二十の宣命（天平宝字元年七月戊申条）に「人の見咎むべき事わざ

なせそ」とあるのはこれにあたるだろう。『古今集』仮名序の「ことわざ」について従来言われている「事業」説は、後者の語義をもって説こうとするものにほかならない。

以上をまとめると、古代においては、「こと」という語は「言」と「事」の両義をあわせ持つものであったので、「ことわざ」なる語も、言語と事業との両方にかかわる語義を有していたということである。そして、言語を意味する「ことわざ」は、「きぎしのひたつかひ」や「さばあま」のように、古くから伝えられた言い習わしを広くさして言うものであったが、後には教訓性をおびた言い習わしが特に「ことわざ」と称されるようになり、現代に至っていると言えるだろう。

そこで、言い習わしを意味する「ことわざ」を語源的に遡及してみると、その語構成から考えて、「ことわざ」とは本来「言（こと）」の「行為（わざ）」、すなわち言語行為、言語活動を意味する言葉であり、後に言語活動によって生み出された特定の言い習わしをも「ことわざ」と称するようになったという見通しを立てることができよう。『古今集』仮名序の「ことわざ」は、このような「ことわざ」の原義が未だ忘れ去られていなかったころの用例ではないかという可能性が、まず第一に考えられる。そして、もう一つの可能性としては、紀貫之が当該箇所を執筆する際に、言語活動を意味する適切な言葉を探しあぐねた末に、「ことわざ」なる言葉にはそのような意味を托することができるはずだと判断して用いたのではないか、ということが考えられよう。またそのような判断は、妥当な語源説の応用として当時の人々に受け入れられたのかもしれない。これは一見、荒唐無稽な想像のようでもある。しかし、かつて柳田国男が「元

来コトワザといふ語は言語の技術、即ち言葉の活用の全体を包容すべきものであった」（「口承文芸とは何か」と述べた時、それは古代文献の用例についての検討を重ねた上での立論ではなく、多分に直感的な判断であったと推測されるのであるが、「ことわざ」なる語の前にすれば、このような語源説を立ててみたくなるのは柳田に限ったことではなかったと思うのである。いずれにしろ、仮名序の「ことわざ」を言語活動と解することは、文脈がそれを要請するのみならず、語史的考察によっても否定しがたいではなからうか。

三

『古今集』仮名序の「ことわざ」は、言語活動を意味する言葉として選びとられたのではないかと述べてきたのであるが、筆者貫之のこのような意図は、後世正しく理解されたであろうか。それは契沖以後の諸注においては、否と言わざるをえないのであるが、中古中世においてはどうかであったか。まず藤原俊成の言説をとりあげてみたい。俊成は『千載集』の序を次のように書き起している。

やまと御言の歌は、ちはやぶる神代よりはじまりて、櫛の葉の名にをふ宮にひろまれり。玉敷き平の都にして、延喜のひじりの御世には古今集を撰ばれ、天曆のかしこき御時には、後撰集を集めたまひき。白河の御世には後拾遺を勅せしめ、堀河の先帝は百千の歌をたてまつらしめたまへり。おほよそこのことわざ我が国の風俗として、これをのみもてあそべば名を世々にのこし、これを学びたづさはらざるは面を垣にしてたてらんがごとし。かりければ、この世に生れと生れ、我が国に來たりと

來たる人は、高きも下れるも、この歌をよまざるは少なし。

ここに見える「ことわざ」が、事業ではなく言語活動を意味することは明白であろう。「このことわざ」とは文中で先に話題になっているところの言語活動、すなわち和歌の詠作をさすのである。したがって新日本古典文学大系『千載和歌集』が「このことわざ」に注して「和歌を指す」としているのは正しい。なお、「ことわざ」という言葉自体に和歌という意味があるわけではないのであって、『角川古語辞典』が「ことわざ（諺）」の項に「③ことばの上に表れたこと。和歌」という語義を立てているのは疑問である。

ところで、俊成が『古今集』を尊重していたことは言うまでもないが、その俊成が『千載集』の序文を執筆するにあたって、冒頭近くに『古今集』仮名序の冒頭部に用いられていた「ことわざ」なる語を使用しているのであるから、これが『古今集』仮名序を意識した用語であることは疑えないだろう。そしてそこから、俊成が『古今集』仮名序の「ことわざ」を言語活動の意に解していた可能性が生じるだろう。なお、俊成は『古來風体抄』巻頭においても「ことわざ」を言語活動の意で用いている。

やまとうたのおこり、そのきたれることとはいかな。ちはやぶるかみよ、りはじまりて、しきしまのくにのことわざとなりけるよりこのかた、そのこゝろおのづから六義にわたり、そのことば万代にくちず。かの古今集の序にいへるがごとく、人のこゝろをたねとしてよろづのことはとなりなければ……（自筆本の影印による）

「ここでも「ことわざ」は言語活動の意であることに疑いはなく、また直後に『古今集』仮名序に言及していることから、この「ことわざ」が『古今集』仮名序に由来する言葉として選取られていることが見てとれよう。

ところで、「ことわざ」なる言葉は『千載集』序文に限らず、『古今集』仮名序の影響のもと、勅撰集の序文に採用されることの多い言葉であって、たとえば『続古今集』仮名序冒頭に「やまとうたは、それすさのをのみことの昔の里には、あしはらのことのはをはじめて伝え、斑鳩のとみのを川には、流れをくみて源をたづねしよりこのかた、そのことわざさかりにおこり」云々とあるのは、まさに言語活動（和歌の詠作）を意味する「ことわざ」である。しかし、その全てが言語活動の意に解されるわけではない。たとえば『後拾遺集』の序文は次のように始まる。

我が君天下のしめしめしてよりこのかた、四の海波の声きこえず、九の国貢き物絶ゆることなし。おほよそ、日のうちによりづのことわざ多かるなかに、花の春、月の秋、折につけ、事へのぞみて、むなしく過ぐしがたくなおはします。

この「よろづのことわざ」の解釈には、事業説を適用すべきであろう。新日本古典文学大系『後拾遺和歌集』が「万機」を和らげて「よろづのことわざ」と言った」と注しているのに首肯されるところである。『新勅撰集』の序文に「白河のかしこき御世、ことわざしげきまつりごとにのぞませたまひて、ななそぢあまりの御よはひたませたまひしはじめ、後拾遺をえらべるひとたびなむありける」と

あるのは、『後拾遺集』について述べるにあたつて、その序文の「よろづのことわざ多かるなかに」を「ことわざしげきまつりごと」と言い換えたのもあるうが、やはり帝王の公務を「ことわざ」なる語で表わしているようである。ともあれこれら仮名序においては、「ことわざ」なる語は『古今集』仮名序を意識しつつ、言語活動と事業との両義に使い分けられているのである。その端的なあらわれは『風雅集』の仮名序に三例見出される「ことわざ」であって、「いはむやまたちかき世となりてよものことわざすたれ、まこと少なくいつはり多くなりにければ」「よろづの道のおとろへ、よものことわざのすたるをなげく」の二例は言語活動の意、「そもそも昔はあまつ日つぎをうけて、もしきのうちしげきことわざにまぎれずぐししを」は事業の意で、帝王の公務を意味するのである。

以上のように、「ことわざ」なる語の両義性が明確に意識され、使い分けられていることが明らかであるからには、中古中世において、『古今集』仮名序の「ことわざ」が言語活動の意に解されるものがあつた可能性は大きいといえよう。管見によれば、『古今集』の古注釈において、仮名序の「ことわざ」について特に言及されることは多くないようであるが、片桐洋一氏の『中世古今集注釈書解題 四』に翻刻されている『蓮心院殿説古今集註』（注⁴）が当該部分に「諺はこと葉にていふわざ也。国によりて言の用やうもかはる也。燕雀のうれふるも、鳳鸞のよろこぶも、みな諺なりと漢にもいはり」と注しているのは、まさに言語活動説にほかならないだろう。また加茂真淵の『続万葉論』が仮名序当該部分の頭注に「或人此ことわざに諺の字を当たるは誤れり」云々とべていることから、仮名序の「ことわざ」に「諺」字をあてて言説に真淵が接したことが

知られるが、まさか仮名序の「ことわざ」を、「善は急げ」「論より証拠」の類の諺と解するはずはないから、ここに言う「諺」も、右の『蓮心院殿説古今集註』と同様、言語活動の意で「諺」の字を用いていたのではないかと推測されよう。

歌書以外の文献において、「ことわざ」が言語活動の意で用いられていることが明らかな例を一つあげておく。『紫式部日記』の、いわゆる消息文の中で、式部が中宮に『白氏文集』の新樂府を教えているという事実が明かされたあとに、「まことにかう読ませたまひなどすること、はたかのものいひの内侍は、え聞かざるべし。知りたれば、いかにそしりはべらむものと、すべて世の中、ことわざしげく、憂きものにはべりけり」とある。これは、左衛門の内侍が式部を中傷したというエピソードにはじまり、式部が学才をひけらかしているという噂が立たないよう細心の注意をはらっているという記述に続く部分であるから、「ことわざ」は言語活動を意味し、「全く世間というものは、口うるさく、煩わしいものでございます」といった解釈が妥当であろう（注⁵）。なお「ことわざしげく」という言い回しは明らかに『古今集』仮名序を意識しており、紫式部が仮名序第二文の「ことわざ」を、事業説ではなく言語活動説で理解していたことをうかがわせる。

四

『古今集』仮名序冒頭部の「ことわざ」なる語について、この語を含む一文が論理的に成り立つためには「ことわざ」を言語活動と解せざるをえないこと、語史的にもこの語を言語活動と解することは可能であること、そして、中古中世においてはそれが言語活動と

解されるむきがあったことを明らかにしてきた。『古今集』仮名序の「ことわざ」は言語活動の意であり、現在通説とされている事業説は誤りと断じてもいいのではなからうか。

事業説が契沖の『古今余材抄』に由来するものであることは確かだろう。仮に契沖以前の『古今集』注釈に事業説が存在したとしても、後世への影響という点で、『古今余材抄』に及ぶべくもないことは明白だからである。

ところで先にも引用したように、契沖は「ことわざは事業なり。諺にはあらず」とのべているのであるが、ここで契沖が否定している「諺」とは何をさしているのだろうか。以下「善は急げ」「論より証拠」の類の、現代でも「ことわざ」と称されている教訓的な慣用句や短文を、片仮名で「コトワザ」と表記して区別しようと思うが、ここで契沖がコトワザをさして「諺」と書いているとは考えられないだろう。「この世に生きる人々は、コトワザを多用するものだから」などという解釈（以下これを「コトワザ説」と称する）は滑稽であり、そのような非常識な解釈をわざわざ想定した上でこれを否定するなどという空論を、契沖がもてあそぶはずはないだろうからである。先にも見たように、言語活動説を「諺」字であらわした注釈が存在したようであり、延宝二年（一六七四）刊の『古今榮雅抄』が、言語活動説によって「ことわざ」を説明した上で「諺」の字、あだことともよめれば、ただ詞の事也」と、「諺」字をあててるのを躊躇しているらしいことも考え合せるならば、中世末期から近世初期にかけて、言語活動説をとる『古今集』注釈は、「ことわざ」に「諺」字をあてることが少なくなかったのではないか。契沖が否定した「諺」とは、まさしく言語活動説にはかならなかったのでは

ないだろうか。

契沖が言語活動説を退け、事業説を立てたのは、真名序の第二文に「人之在世不能無為」（人の世に在る、無為なること能はず）とあるのを根拠としているのかもしれない。新日本古典文学大系『古今和歌集』は、これを「人はこの世にあつて何かをしないわけにはいかず」と解している。これが「仮名序」の「世の中にある人、ことわざしげきものなれば」という一節に相当する本文と考えるならば、「ことわざ」について事業説が着想される理由があつたと言えよう。しかし、仮名序は真名序の翻訳文ではなく、またその逆でもないことは、両序を読み比べれば自明であり、真名序の記述を根拠として仮名序を解釈するのは不当であらう。むしろ両者の相違は、仮名序と真名序とが、ひいては和文と漢文とが、思想を異にする文体であることの現われとして理解すべきなのではないか。

さて、最後に考えておきたいのは、契沖の事業説が現在に至るまで文字通り定説として継承される一方で、言語活動説が全く顧みられなかった理由である。端的に言つて、それは『古今余材抄』を誤読した結果ではないかと思う。先にのべたように、契沖は「諺」字を言語活動の意で用いたが、後世これがコトワザの意にうけとられ、現在に及んでいるのではないか。つまり、契沖は事業説と言語活動説を対置し、おそらくは真名序の記述を根拠として前者を選び取つたのであつたにもかかわらず、後世の人々はこれを事業説とコトワザ説の対置と誤解し、コトワザ説がとるに足りない説であることは自明だから、もう一方の事業説を抵抗なく受け入れてしまったのではないだろうか。

このような誤解が生じる可能性は、すでに契沖の生きた時代にも

存在したようである。元禄期は人々のコトワザに対する関心が高まつた時代であつたようで、コトワザ辞典の類がいくつも刊行されているが、中でも著名な『諺草』（貝原好古著 元禄十四年刊）の序文に、次のようなくだりがある。

今又世俗にとふる諺、児女のいふ詞どもの、からの、やまとの文どもに本づきたる、出所正しきをゑらびて、これをしるし、ちかき人の、あつめおけるかなん文どもに、和語をとけるものあるをも、ひろひとりて、冊子となしはべり。もとよりつたなきことわざなれば、よし見る人もあらじと、おもひ侍れど……

（『益軒全集』による）

ここで「諺」と表記されている語はコトワザを意味し、「ことわざ」と表記されている語は事業の意にはかならない。「ことわざ」なる言葉が事業とコトワザとの両義に使いわけられているのであるが、このような言説がなされる時代にあつて、契沖の「諺にあらず」という立言は、当時すでにして誤解をまねきやすい一文であり、後世「コトワザにあらず」の意と誤解されたとすると、それも当然のことであつたといえよう。

注

注1 引用は『新編国歌大観』により、適宜表記を改めた。以下、勅撰集からの引用は全て同書による。

注2 武庫川女子大学『言語文化研究所年報』第十二号（平成十二年七月）所収。

注3 竹岡正夫『古今和歌集全評釈』補訂版（昭和五十六年 右文書院）

注4 片桐洋一の解題によれば、河野記念館本『蓮心院殿説古今集註』は、飛鳥井栄雅の説を基幹として、さまざまな説を加えたものとのことである。

注5 萩谷朴『紫式部日記全注釈 下巻』（昭和四十八年二月 角川書店）も、これと同様の解釈をとっている（同書三〇六ページ）。ちなみに、引用文中の「ものいひの内侍」については、萩谷氏をはじめ、諸注において特に言及がなされていないが、これが「日本紀の御局」という悪意のこもったあだ名に対するしっぺがえしであろうことは強調されてもいいのではないだろうか。

（とくはら・しげみ 本学名誉教授）